

多くの生物が集まる藤前干潟は大都市名古屋の生物の宝庫です。  
藤前干潟を保全するため、私たちに何ができるのでしょうか。  
藤前干潟を訪れ、考えてみませんか。

## ラムサール条約

### ラムサール条約って何？

1971年にイランのカスピ海のほとりにあるラムサールという町で「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」が採択されました。これが「ラムサール条約」です。日本は、1980年にラムサール条約を締約しました。日本には、藤前干潟を含む37カ所の湿地が条約に登録されています。(2009年7月末現在)

ラムサール条約では、湿地を水鳥の生息地としてだけでなく、私たちの生活環境を支える重要な生態系として保全や再生をすすめていくこと、湿地のめぐみをいつまでも受けられるような利用の仕方を考えていくこと(ラムサール条約では、このことを「賢明な利用」といっています。)を呼びかけています。

藤前干潟は2002年の第8回締約国会議(スペイン・バレンシアで開催)で登録されました。

ラムサール条約は、登録されているかどうかによらず、山から海までのすべての湿地が重要とされています。藤前干潟の登録は、それがゴールではなく、源流の森から伊勢湾の海までの、山川里海のかつてのゆたかさを取り戻していく出発点となっています。

## 生物多様性条約

### 生物多様性条約って何？

私たちは地球の生態系の一員として、動物や植物をはじめ様々な生物と共存しています。そして、これらの生物は、食べ物、木材、医薬品など、いろいろな側面から私たちの生活を支え、多くの恵みをもたらしています。しかし、近年、生物種の絶滅が過去にないスピードで進んでいます。

「生物多様性条約」は、特定の地域や種類の生物の保護だけを目的とするのではなく、生物の多様性の包括的な保全、生物資源の持続可能な利用、遺伝資源の利用から生じる利益の公正な配分を目的として、1992年に採択されました。

2010年、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)の名古屋での開催をきっかけに、私たちも身近な生き物やいのちのつながりについて考えてみましょう。

## 藤前干潟案内図

### ■ 稲永ビジターセンター、名古屋市野鳥観察館

- ◆あおなみ線[野跡]駅下車、徒歩10分  
または
- ◆地下鉄  
名港線「築地口」駅から市バス[野跡駅]下車、徒歩10分  
その他、名古屋駅、金山駅から「野跡駅」行き、市バス運行

### ■ 藤前活動センター

- 名古屋駅の名鉄バスセンターより、
- ◆三重交通バス  
「サンビーチ日光川行」、「長島温泉行」、「南桑名行」に乗って、  
【南陽町藤前】下車、藤前公園に沿って南へ徒歩10分



【発行】名古屋環境局環境都市推進課 〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1-1 TEL:052-972-2661 FAX:052-972-4134  
【企画】NPO法人 藤前干潟を守る会 〒466-0002 名古屋市中区昭和区吹上町一丁目29-1-211 TEL/FAX:052-735-0106

このパンフレットは、古紙パルプを含む再生紙を使用しています

# 藤前干潟が つなぐ世界

そのことは、  
渡り鳥が教えてくれます  
鳥が食べる干潟の生き物が教えてくれます  
あなたは、ただ無心に  
五感のセンサーをいっぱいひろげて  
出かけてきてください  
ようこそ！藤前干潟へ



# 藤前干潟は鳥たちの休息地

藤前干潟は、たくさんの渡り鳥が来る国際的に重要な湿地として、2002年に「ラムサール条約」に登録されました。

渡り鳥の種類はいろいろありますが、藤前干潟に多いのはハマシギやダイシャクシギ、ダイゼンなどのシギ・チドリ類です。ここには春と秋の2回、シギ・チドリ類が多く見られるようになります。そのほか、夏にはコアジサシ、冬にはスズガモやオナガガモなどのカモ類が多く見られます。

これらはすべて季節ごとに移動する「渡り鳥」です。カワウやカルガモ、ミサゴなど、1年を通して見られる鳥も多くいます。

## 藤前干潟周辺に飛来する渡り鳥



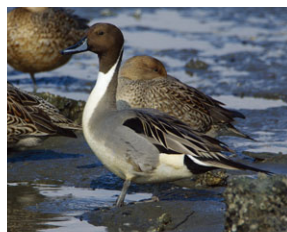
● **ハマシギ**  
藤前干潟を代表する小型のシギ類。数百羽の群れを作って飛び回る光景が有名。



● **ダイシャクシギ**  
長いくちばしが特徴的な大型のシギ。長距離の渡りをする事で知られる。



● **ダイゼン**  
渡りの途中に立ち寄るチドリの仲間。夏と冬で羽の色が異なる。写真は夏羽。



● **オナガガモ**  
名前のとおり、尾羽が長く伸びているのが特徴の淡水ガモ。オスとメスで色が異なる。写真はオス。



● **コアジサシ**  
夏に渡ってくるカモメの仲間。水面に飛び込んで魚をとる光景がよく見られる。



● **スズガモ**  
白と黒の色分けが特徴的な海ガモ類。二枚貝などの動物質のエサをとる。

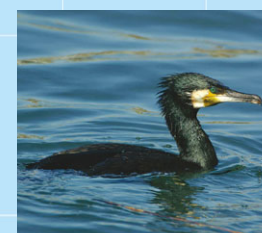
右の図はシギやチドリがどのように季節ごとの移動をするかを示したものです。夏はシベリアやアラスカ、冬は東南アジアやオーストラリアまで移動するものもいます。このような移動ルートがわかってきたのは最近のことです。

このような長い旅の途中、鳥たちは湿地でしばらく休んで体力を回復させながら移動していきます(藤前干潟もそのうちの1つです)。渡り鳥が生活するためには、そのルート上のすべての湿地が必要なので、国際的な協力によってそれらを保全するようにしたのがラムサール条約です。



- 渡り鳥の移動ルートはどのようにして調べることができるか考えよう。
- 日本の法律で湿地をどのように守っているか調べよう。
- ジロングの湿地と藤前干潟を比べて、共通点や違っている点について考えよう。

## 藤前干潟周辺で1年を通じて見られる鳥



● **カワウ**  
山地で営巣し、海や川にやってきてエサをとる。集団で魚の群れを追い込んで捕食する。



● **カルガモ**  
一年中国内で見られる淡水ガモ。オス・メス同色でくちばしの先の黄色が目印。



● **ミサゴ**  
魚食性の中型のタカ。飛んでいる姿は白っぽく見える。ふだんは流木などに止まっていることが多い。

## 名古屋・ジロング湿地提携

名古屋市は2007年、オーストラリアのジロング市と、湿地提携を結びました。

ジロング市はオーストラリアの南東にあり、「スワンベイ干潟」をはじめいくつもの湿地がラムサール条約登録地になっています。藤前干潟と同じ渡りのルート上にあるので、冬にジロング市にいた鳥が春には藤前干潟で見られる、ということもあるかもしれません。



ジロングの湿地(コネワラ湖)

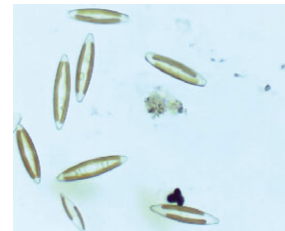
以下のアドレスから、藤前干潟とジロングの湿地のライブ映像を見ることができます。名古屋市環境情報ネット <http://www.kankyo-net.city.nagoya.jp/>

# 干潟の生態系

干潟の重要なはたらきの一つに「水質浄化作用」があります。「汚れた水をきれいにする」ということですが、それには干潟の生物が大きな役割を果たしています。



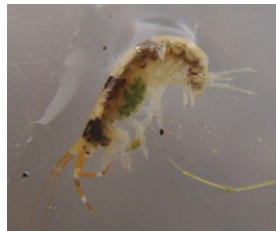
藤前干潟に流れ込んでくる川の水は、森からの養分とともに、田畑やまわりの市街地から出た汚れ(有機物)をたくさん含んでいます。



● ケイソウ  
水中や干潟の表面に発生する植物プランクトン。食物連鎖の出発点。



● ゴカイ  
泥の中の有機物を食べると同時に、魚類や鳥類など、いろいろな生物のエサになる。



● ヨコエビ  
体長数ミリの小さな甲殻類。干潟の表面に無数に生息し、小型の鳥がおもに食べる。



● ヤマトオサガニ  
干潟の環境に適応した生態のカニ。干潟の環境に適応した生態のカニ。干潟の環境に適応した生態のカニ。大型のシギ類はこのカニが好物。



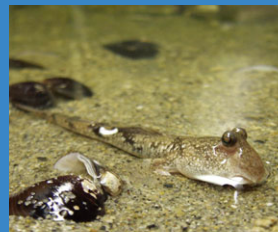
● ヤマトシジミ  
汽水域に住む大型のシジミ。アサリのいない藤前ではヤマトシジミが二枚貝の代表。



● アナジャコ  
干潟の泥の中に2m以上の深い穴を掘って生息。水中の有機物をこしとって食べる。

干潟ではいろいろな生物の「食べる・食べられる関係」(食物連鎖)がうまくはたらい、水質の悪化を防ぐようになっています。藤前干潟に鳥がたくさん来るのはそれだけエサになる生物が多いからですが、エサを食べると同時に、水の汚れも取り除いていることになります。

干潟を埋め立ててしまったような所では、プランクトンが発生してもそれを食べる生物がないので、そのまま死んだプランクトンが腐って水質を悪化させ(赤潮)、漁業に影響が出るなどの問題が起きています。そのため最近では、人工的に干潟を作ったり、一度干拓した所を干潟に戻すなどの試みもされるようになりました。



● トビハゼ  
前足の胸ビレと尾ビレで泥の上を跳ねて移動する。泳ぎは苦手。



● ウナギ  
海と川を移動する魚。伊勢湾と庄内川の接点になる藤前では昔からよく捕れた。



● ボラ(稚魚)  
河口・汽水域に住む魚で、成長に応じて呼び名が変わる「出世魚」として知られる。

有機物を食べて、まず植物プランクトン、次に動物プランクトンが大量に発生します。それを泥の中にいるゴカイやカニ、シジミなどが食べ、さらにそれを鳥や魚が食べ、残った分はバクテリアが分解します。ここで育った稚魚は大きくなると伊勢湾に出て行き、漁師が捕らえて街の市場へ売られ、そして私たちの食卓にのぼります。

- 私たちの暮らしと、干潟とのつながりを考えよう。
- 家庭から出る排水がどのように処理されているか調べよう。
- 「干潟の浄化能力」がどれくらいあるか調べる方法を考えよう。

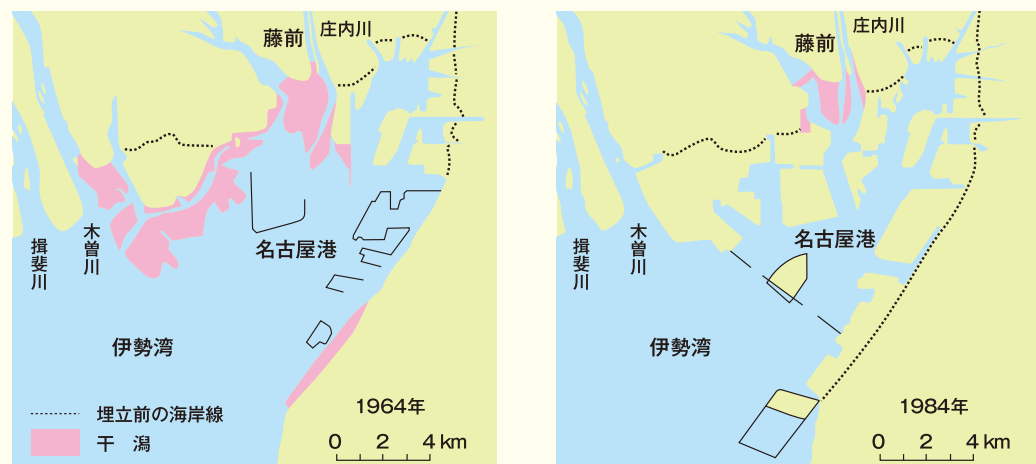
# 干潟の変遷 ~藤前干潟はこうして残った!~

むかし、伊勢湾の奥には広大な干潟が広がっていました。今の名古屋市の南部一帯も干潟で、名古屋駅のあたりまで続いていたといわれます。その広大な干潟は「あゆち潟」と呼ばれ、8世紀に作られた『万葉集』にも歌われています。現在の「愛知」という県名もここからとられたものです。

その干潟は江戸時代のころから干拓されるようになりました。はじめは新田開発のため、その後は住宅や工業用地として埋め立てられ、最後にほんのわずかな部分として残ったのが「藤前干潟」です。下の図は20年間にどれくらいの干潟が埋め立てられたかを示したものです。このころ、同じような状況が日本中で見られました。

藤前干潟にはたくさんの渡り鳥が来ますが、本来ならもっと広い干潟に分散するところを、残されたわずかな部分に集中し、全体の数が減り続けています。少しでも残ったということは重要ですが、それで十分だと思わずに、「どうすればもっとよい状態にできるか」ということも考えていく必要があります。

## 臨海工業開発の中で奇跡的に残った藤前干潟

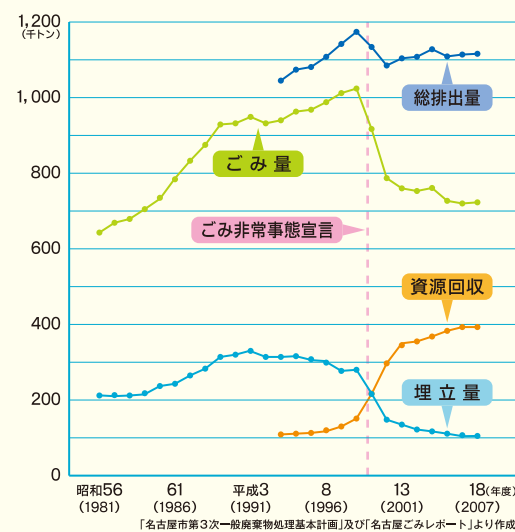


1981年、藤前干潟を一般廃棄物の最終処分場として位置づける計画が発表されました。当時、名古屋市には3カ所の処分場がありましたが、残された埋立容量はわずかで、ごみの発生量を考えれば、平成12年度には満杯になってしまうと予想されていました。

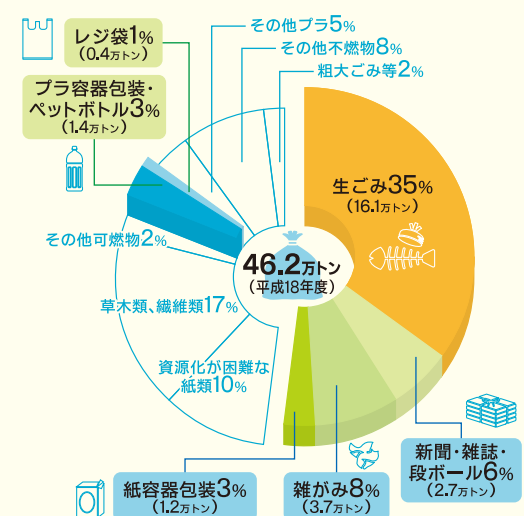
計画発表当時から、市民による藤前干潟の保全活動が続けられ、干潟保全の世論が高まっていきました。その結果、1999年1月、計画を断念し、代わりに「ごみ非常事態」を2月に宣言し、ごみを減らす努力をすることにしました。その翌年からごみを細かく分別して特に不燃ごみ(埋め立て処分をする)を減らすようにしました。現在の名古屋市のごみと資源の分別ルールはこの時に決められたものです。

全市民の協力で、ごみを大幅に減らすことができましたが、なくなったわけではありません。少しでもごみを出し続ければ処分場はいつか一杯になります。その時にどうするかを考えるのではなく、私たちは今まさに何をすべきか考えていく必要があります。

## ごみ量と資源回収量等の推移



## 家庭ごみの内訳



- 伊勢湾の奥に干潟ができた理由を考えよう。
- 『万葉集』の時代・江戸時代は今から何年くらい前になるか調べよう。
- 日本にはほかにどのような干潟があるか調べよう。
- 藤前干潟がもっとよい状態になるにはどうすればよいか考えよう。

- 資源やごみがどのように処理されているか調べよう。
- 処分場を長く使うには、どうするのがよいか考えよう。
- ごみを発生源からなくしていくにはどうすればよいか考えよう。